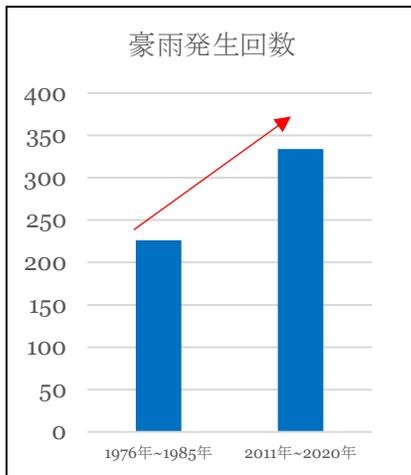


水・環境の話

第2号



豪雨の増加と都市部の水害対策

近年、地球温暖化に伴う気候変動によって、強力な台風の増加やゲリラ豪雨などの水害が多く発生しています。1時間降水量50mm以上の豪雨発生件数は40年間で1.5倍に増加しました。こうした状況を受け、全国の市町村で水害対策施設の整備が進んでいます。

特に都市部においては、人口の集中や地下空間の利用が多い為に水害発生時に被害が拡大する可能性が高く、大規模な水害対策に取り組んでいます。

名古屋市の大規模水害対策施設

平成20年8月末豪雨により著しい浸水被害が発生したことを受けて、名古屋駅周辺を含む西区・中村区・中川区の浸水被害の軽減を目的に、1時間60ミリの降雨に対応する「名古屋中央雨水調整池」を建設しています。市街地に降った雨を一時的に貯めこみ、同時に中川運河へ排水する仕組みです。全長は約5kmで、地下50mの深さに内径5.75mのトンネルを掘り、104,000m³（小学校のプール416杯分！）の水を貯めることが出来ます。リニア中央新幹線や地下鉄のさらに下にトンネルを掘る大プロジェクトです。藤吉工業の本社も、この施設の水害対策対象エリアに含まれます。2021年2月現在で、全体の6割程まで掘り進んでいます。

大阪府の大深度地下河川

排水路・放水路は道路下に建設することが多いですが、大阪府では道路の整備進捗を待たずに地下河川を早期完成を図るため、トンネル上の土地所有者の補償が免除される大深度地下の使用認可を取得し地下70mに「寝屋川北部地下河川」を整備しています。

世界最大級の地下放水路

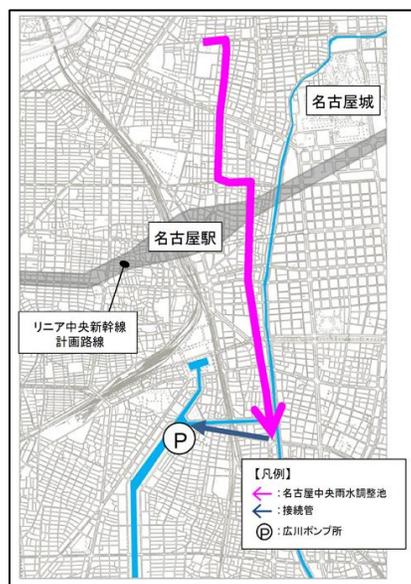
埼玉県に、「首都圏外郭放水路」という世界最大級の雨水貯留施設があります。全長は6.3kmで、地下50mを直径10mのトンネルが通っています。また、水を一時的に貯める調圧水槽は67万m³の容量を誇り、巨大な柱が立ち並ぶ荘厳な姿から「地下神殿」と呼ばれ、ロケ地や観光スポットとしても人気です。2019年の台風19号の際には、接続する5つの河川全てから水を引き込み、1,218万m³の水を水位に余裕のあった江戸川に排水しました。

まとめ

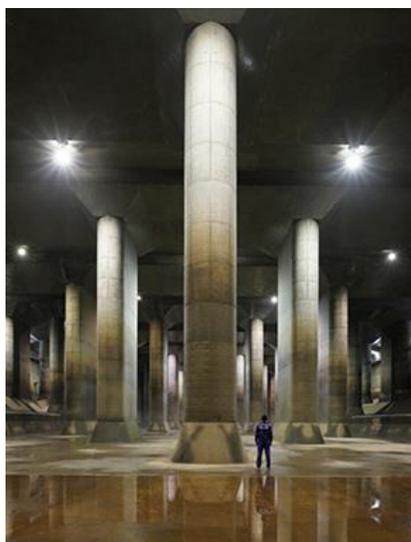
身近な場所でも、見えないところで災害対策が進んでおり、知らないところで守られています。今後も豪雨や災害が無くなることはありません。まずは自分の住んでいる地区でどんな対策があるか知り、自分で出来る対策を考えることが重要ではないでしょうか。

個人でできる水害対策として、使わなくなった浄化槽を雨水貯留槽へ転用する方法があります。未使用の浄化槽を雨水タンクにして水を一時的に貯めることで、ゲリラ豪雨の際に側溝に急激に流れ込む水量を減らして地域の浸水対策になります。補助金が出る自治体もあるそうです。

先の事が想定できない時代だからこそ、今やれることを自分で考えて実行していきたいですね。



名古屋中央貯水池の建設ルート



地下神殿のような調圧水槽